

## メシアの資質

【聖書箇所】 イザヤ書 11 章 1～2 節

【新改訳 2017】 イザヤ書 11 章 1～2 節

- 1 エッサイの根株から新芽が生え、その根から若枝が出て実を結ぶ。
- 2 その上に【主】の霊がとどまる。それは知恵と悟りの霊、思慮と力の霊、【主】を恐れる、知識の霊である。

### ベレーシート

●今年(2019年)のセレブレイト・スッコートの最初の礼拝では、イエシュアの誕生に先立って、旧約聖書に記された「メシア預言」について取り上げたいと思います。イザヤ書にはいくつかのメシア預言があります。たとえば 7 章の「インマヌエル預言」、9 章 6～7 節「ひとりのみどりごが私たちのために生まれる。…その名は『不思議な助言者、力ある神、永遠の父、平和の君』と呼ばれる。」は良く知られているところです。しかし、11 章 1 節の「**エッサイの根株から生えた新芽、その根から出た若枝が出て実を結ぶ**」は比較的取り上げられることは少ないように思います。そこで、今回はイザヤ書 11 章 1～2 節のメシア預言に注目し、そのテーマである「**メシアの資質**」について思いを巡らしたいと思います。

### 1. エッサイの根株から生えた新芽、その根から出た若枝

●1 節の「エッサイの根株」とは、エッサイから出る子孫を意味します。この預言はエッサイの息子であるダビデのことを指しているわけではありません。なぜなら、イザヤの時代はダビデの時代よりずっと後だからです。「エッサイ」は「ベツレヘム」の人であり、ボアズとルツの子孫です。エッサイの系列をここでは「新芽」(「ホーテル」**רֹחַ**)と「若枝」(「ネーツェル」**רֶצֶן**)で言い表しています。「新芽」(「ホーテル」**רֹחַ**)も「若枝」(「ネーツェル」**רֶצֶן**)も、いずれも単数名詞であり、パラレリズムで同義です。

●前者の「新芽」と訳された「ホーテル」(**רֹחַ**)は、イザヤ書 11 章 1 節と箴言 14 章 3 節の 2 箇所にしが使われていませんが、新約のヤコブの手紙 3 章 2～7 節がこのことばの注解をしているように思われます。どういうことかと言えば、人間の器官である「舌」を例に挙げて、その小さな器官が良くも悪くも、からだ全体に影響を与えるものとなるように、「新芽」もそのような**大きな影響を与える存在となる**という意味です。

●後者の「若枝」と訳された「ネーツェル」(**רֶצֶן**)ですが、イザヤ書では 3 回(11:1、14:19、60:21)、ダニエル書 1 回(11:7)の計 4 回だけです。小さな枝であるゆえに(LXX 訳聖書では 14:19 は「屍」と読み替えられます)投げ捨てられるか、神の植えた枝であるゆえに、それがやがて神の栄光を表わすものとなるという意味があります。動詞の「ナーツァル」(**רָצַן**)は使用頻度が 64 回もあり、その主な意味は、**神の恵みが千代にまで「保たれる、守られる」という意味と、人も神の仰せにどこまでも従って守っていく**という意味もある語彙で、それがやがて「実を結ぶ」ものになるというのが、「若枝」に込められた意味です。

●したがって、「新芽」(ホーテル)も「若枝」(ネーツェル)も、**メシアの称号**として実にふさわしいのです。しかも、「ネーツェル」は、御子イエシュアが公生涯に入る 30 歳まで育った「ナザレ」の町を意味するようになるのです。ですから、「これは預言者たちを通して『この方はナザレ人と呼ばれる』と言われたことが成就するためであった」(マタイ 2:23)とされているのです。

●この預言が描いているイメージは、**切り株を残して、伐採された木**です。ところが、伐採され、無価値とされた切り株からひとつの新芽が生え出てきて、木の生命力が回復され、それが生い育って悪を排除し、時を経てもとの栄光を取り戻し、全世界に祝福をもたらすという預言なのです。



●北イスラエル王国はアッシリアによってすでに根株ごと引き抜かれてしまいましたが、神殿のあった南ユダ王国の崩壊と捕囚は、木が切られてしまいましたが、根株は残されたままでした。それ以来、エルサレムは異邦人に支配され続けることになったのですが、この預言は「エッサイの根株から」「エッサイの根から」とあるように、それは**ダビデの子孫からメシアが新芽として生え、若枝として出てくる**ことが預言されているのです。

●ちなみに、「**エッサイの根株から生えた新芽、その根から若枝が出て実を結ぶ**」の「根株」は「ゲーザ」(גֵּזָא)で、木の幹の根を表します。つまり、イエシュアに継がれる家系の象徴です。「根」は「ショーレシュ」(שֹׁרֵשׁ)で、子孫のルーツを意味します。

## 2. メシアの三つの資質

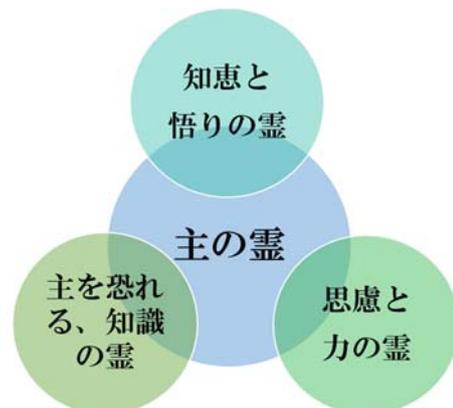
●「**新芽**」も「**若枝**」も**メシアを表す象徴**です。そこで今回は、このメシアの資質について、イザヤ書 11 章 2 節から「主の霊を宿したメシア」の資質について、三つの面から学びたいと思います。

【新改訳 2017】イザヤ書 11 章 2 節

その上に【主】の霊がとどまる。それは知恵と悟りの霊、思慮と力の霊、【主】を恐れる、知識の霊である。

●ところで、メシアに注がれる「主の霊」(「ルーアツハ・アドナイ」רוּחַ יְהוָה)は、どのような特質を与えるのかを見てみましょう。以下の三つのグループに分けられますが、それらはいずれも王に求められる資質なのです。

- 第一はメシアの**知的資質**としての「**知恵と悟りの霊**」
- 第二はメシアの**統制的資質**としての「**思慮と力の霊**」
- 第三はメシアの**霊的資質**としての「**主を恐れる、知識の霊**」



●その前提として、これら三つのメシアの資質は、すべてはメシアの上に「主の霊がとどまる」ことから言えることなのです。

### (1) 主の霊がとどまるメシア

●「とどまる」と訳されたヘブル語は「ナーハー」(נָהַר)で、その初出箇所は創世記 2 章 8 節です。

【新改訳 2017】創世記 2 章 8 節

神である【主】は東の方のエデンに園を設け、そこにご自分が形造った人を置かれた。

●「置かれた」が初出の「ナーハー」です。神が最初に造られた人とエデンの園は切っても切れない関係として神が位置づけたことを意味しています。同様に、イエシュアがマリアに受胎したときも、聖霊が彼女を覆ったことで、イエシュアに聖霊が「置かれた(とどまった)」のです。また、ヨハネからバプテスマを受けられた時、天が開かれて、神の御霊が鳩のように下って彼の上に来られましたが、これも、イエシュアがこの世においてその働きにふさわしく「置かれる」ために、御霊が遣わされたことを物語っています。

●イエシュアの公生涯において、御国の福音の宣教を開始される前に、悪魔の試みを受けるために御霊に導かれて荒野に上って行かれました。主の霊が「置かれる、とどまる」というのは、メシアであるイエシュアが単独ではその働きをなし得ないということです。御霊との密接なかかわり、永続的なかかわりを意味しています。ここで、メシアなるイエシュアが聖霊に満たされていることが強調されている聖書の箇所をまとめておきたいと思います。

①【新改訳 2017】ルカ 1:35 **受胎**

御使いは彼女に答えた。「**聖霊があなたの上に臨み、いと高き方の力があなたをおおいます。それゆえ、生まれる子は聖なる者、神の子と呼ばれます。**

②【新改訳 2017】マタ 3:16 **公生涯の開始**

イエスはバプテスマを受けて、すぐに水から上がられた。すると見よ、天が開け、**神の御霊が鳩のようにご自分の上に降って来られるのをご覧になった。**

③【新改訳 2017】ルカ 4:1

さて、イエスは**聖霊に満ちて**ヨルダンから帰られた。そして**御霊によって**荒野に導かれ、

④【新改訳 2017】ルカ 4:14

イエスは**御霊の力を帯びて**ガリラヤに帰られた。すると、その評判が周辺一帯に広まった。

⑤【新改訳 2017】ルカ 4:18

**主の霊がわたしの上にある。貧しい人に良い知らせを伝えるため、主はわたしに油を注ぎ、わたしを遣わされた。捕らわれ人には解放を、目の見えない人には目の開かれることを告げ、虐げられている人を自由の身とし、**

⑥【新改訳 2017】マタ 12:18

見よ。わたしが選んだわたしのしもべ、わたしの心が喜ぶ、わたしの愛する者。**わたしは彼の上にわたしの霊を授け、彼は異邦人にさばきを告げる。**

⑦【新改訳 2017】ヨハ 3:34

神が遣わした方は、神のことばを語られる。神が御霊を限りなくお与えになるからである。

## (2) メシアの知的資質としての「知恵と悟りの霊」

●「知恵と悟りの霊」は、ヘブル語で「ルーアッハ・ホフマー・ウーヴィーナー」(הַיָּוִי וְהַחֵמָה וְהַדָּבָר)です。王が、その統治者として国を治めていくときに備えておくべき資質なのです。

●ダビデの後継者であった王ソロモンに、主は現われて言いました。

【新改訳 2017】I 列王記 3 章 5~13 節

5 ギブオンで【主】は夜の夢のうちにソロモンに現れた。神は仰せられた。「あなたに何を与えようか。願え。」

6 ソロモンは言った。「あなたは、あなたのしもべ、私の父ダビデに大いなる恵みを施されました。父があなたに対し真実と正義と真心をもって、あなたの御前に歩んだからです。あなたはこの大いなる恵みを父のために保ち、今日のうに、その王座に着いている子に彼にお与えになりました。」

7 わが神、【主】よ。今あなたは私の父ダビデに代わって、このしもべを王とされました。しかし私は小さな子どもで、出入りする術を知りません。

8 そのうえ、しもべは、あなたが選んだあなたの民の中にいます。あまりにも多くて、数えることも調べることもできないほど大勢の民です。

9 善悪を判断してあなたの民をさばくために、聞き分ける心をしもべに与えてください。さもなければ、だれに、この大勢のあなたの民をさばくことができるでしょうか。」

10 これは主のみこころにかなった。ソロモンがこのことを願ったからである。

11 神は彼に仰せられた。「あなたがこのことを願い、自分のために長寿を願わず、自分のために富を願わず、あなたの敵のいのちさえ願わず、むしろ、自分のために正しい訴えを聞き分ける判断力を願ったので、

12 見よ、わたしはあなたが言ったとおりにする。見よ。わたしはあなたに、**知恵と判断の心を与える**。あなたより前に、あなたのような者はなく、あなたの後に、あなたのような者は起こらない。

13 そのうえ、あなたが願わなかったもの、富と誉れもあなたに与える。あなたが生きているかぎり、王たちの中であなたに並ぶ者は一人もいない。

●ここには、ソロモンに与えられた「知恵の心と判断する心」があります。12 節にある「**知恵と判断の心**」こそが、メシアに約束された「ホフマー」(חֵמָה)と「ビーナー」(יָוִי)なのです。ソロモンが示した知恵がどのようなものであったか、I 列王記 3 章 14 節以降にそれを示す例があります。王のところに「遊女」が裁きを求めてやって来たことで、王は二人の争い事を聞き、さばきを行ったのです。その結果は？

●しかし、ソロモンよりも勝る方がおられます。その方こそ「神の御子イエシュア」です。パウロは、「神の知恵」とは「十字架にかかれたキリスト」だと言いました。「十字架のことば」は神の力だと伝えました。これはどういう意味でしょう。パウロはコリントに宛てた手紙の中でこのテーマについて記しています。

【新改訳 2017】 I コリント書 1 章 18~25 節

- 18 十字架のことばは、滅びる者たちには愚かであっても、救われる私たちには神の力です。
- 19 「わたしは知恵ある者の知恵を滅ぼし、悟りある者の悟りを消し去る」と書いてあるからです。
- 20 知恵ある者はどこにいるのですか。学者はどこにいるのですか。この世の論客はどこにいるのですか。  
神は、この世の知恵を愚かなものにされたではありませんか。
- 21 神の知恵により、この世は自分の知恵によって神を知ることがありませんでした。  
それゆえ神は、宣教のことばの愚かさを通して、信じる者を救うことにされたのです。
- 22 ユダヤ人はしるしを要求し、ギリシア人は知恵を追求します。
- 23 しかし、私たちは十字架につけられたキリストを宣べ伝えます。ユダヤ人にとってはつまずき、  
異邦人にとっては愚かなことですが、
- 24 ユダヤ人であってもギリシア人であっても、召された者たちにとっては、神の力、神の知恵であるキリストです。
- 25 神の愚かさは人よりも賢く、神の弱さは人よりも強いからです。

●十字架のことば(Ὁ λόγος ὁ τοῦ σταυροῦ)は、ユダヤ人にとってはつまずきとなる。これはどういうことでしょうか。ユダヤ人が求めるメシア像とは、自分たちを異邦人であるローマ帝国への従属から解放する力を持ったメシアでした。これがユダヤ人の求めるメシアの「しるし」だったのです。イエシュアはこのような「しるし」に対して、「ヨナのしるし」以外にはないと答えました(マタイ 12:39)。「ヨナのしるし」とは、ヨナが三日三晩大魚の腹の中にいたように「人の子」メシアも三日三晩墓の中に横たわるということです。すなわち、死んで葬られるということです。死による自己犠牲以外には、メシアとしてのしるしはないというのがイエシュアの答えでした。力と栄光とをメシアのしるしと考えていたユダヤ人にとって、メシアが苦難を受けるということは「つまずき」を意味したのです (1:23)。

●十字架のことばは、ギリシア人にとって愚かである。これはどういうことでしょうか。ギリシア人にとって、愛とは必ず価値ある相手に向けられるものです。これがギリシア人の知恵なのです。人よりも優れた者を称賛するという点においてそれは現わされます。オリンピックがなぜギリシアから始まったのかはそうした理由からです。ところで、神という存在は最高に価値ある存在です。ですから、神を愛することは知恵にかなっていますが、神が他のものを愛することがすでに愚かであるのに、これに加えて、神が価値のないものを愛するということは、愚かさの極みなのです。

●しかし、福音は「神が価値のない罪人を愛する」というメッセージなのです。十字架のことば、すなわち神がキリストにおいて罪人である私たちを愛されたという贖いの死(身代わりの死)は、ユダヤ人やギリシア人にとっては、愚かさや弱さ以外のなにものでもないのです。その神の愚かさや弱さは人間の知恵よりも賢く、また強いのであるということ、パウロは主張したのです(1:25)。教会はこのような十字架の福音をゆだねられているのです。

## (2) メシアの統治的資質としての「思慮と力の霊」

●「思慮と力の霊」は、ヘブル語で「ルーアッハ・エーツァー・ウーゲヴラー」(לְרוּחַ וְכֹחַ וְעֵצָה)です。これも、王が一国の統治者として国を治めていくときに備えておくべき統治的資質です。「思慮」と訳されたヘブル語は「エーツァー」(עֵצָה)で、それは「はかりごと、計画」を意味する語彙です。イエシュアが宣教を開始したときに言われたことばは、「天の御国が近づいた。悔い改めて、福音を信じなさい」でした。イエシュアは天の御国という神のご計画を伝え、教えるために来たのです。

●また、「力」と訳されたヘブル語の「ゲヴラー」(כֹּחַ)は、神のご計画である「御国」がいかなるものであるかを示すための教える力や奇蹟をなす力です。山上の説教をはじめとするさまざまな御国に関する教え、そして、いやしをはじめとする奇蹟などです。立派な計画を立てても、それを実行できなければ、計画倒れになってしまいます。ナザレの人々の驚きは、イエシュアがその力をどこから得たのか分からずに、イエシュアにつまづきました。この「神のご計画、神のはかりごとを実行に移す力、力あるわざ」こそ、「ゲヴラー」(כֹּחַ)なのです。

●イエシュアは神のご計画を実現するために、パリサイ人や律法学者たちとも論争し、人を恐れることなく、勇気をもって、敢然と立ち向かい、神のご計画を実現・達成されたのです。

### (3) メシアの霊的資質としての「【主】を恐れる、知識の霊」

●最後に、「【主】を恐れる、知識の霊」は、ヘブル語で「ルーアッハ・ダアット・ヴェイルアット・アドナイ」(לְרוּחַ יְהוָה וְדָאֵת וְיִרְאָה אֱלֹהִים)です。これもメシアが身に着けるべき最も大切な霊的資質です。「恐れ」と「知識」は、いずれも神に対する信頼と神に対する恐れ(畏れ)を意味します。主を知らないことは重大な罪です。なぜなら、メシアが打ち建てる御国においては、「【主】を知ることが、海をおおう水のように地に満ちる」のです(イザヤ 11:9)。これは神と人とがともに住む御国では最も重要なことです。「知る」は、神のみこころとひとつになることだからです。

●イエシュア・メシアは、だれよりも神を知っておられました。イエシュアは自分と御父との関係を次のように言われました。特に、ヨハネの福音書ではこのことが顕著です。

①「いまだかつて神を見た者はいない。父のふところにおられるひとり子の神が、神を説き明かされたのである。」(1:18)

②「子は、父がしておられることを見て行う以外には、自分から何も行うことはできません。すべて父がなさることを、子ども同様にを行うのです。」(5:19)

③「わたしは、自分からは何も行うことができません。ただ聞いたとおりにさばきます。そして、わたしのさばきは正しいのです。わたしは自分の意志ではなく、わたしを遣わされた方のみこころを求めるからです。」(5:30)

④「わたしが天から下って来たのは、自分の思いを行うためではなく、わたしを遣わされた方のみこころを行うためです。わたしを遣わされた方のみこころは、わたしに与えてくださったすべての者を、わたしが一人も失うことなく、終わりの日によみがえらせることです。わたしの父のみこころは、子を見て信じる者がみな永遠のいのちを持ち、わたしがその人を終わりの日によみがえらせることなのです。」(6:38~40)

⑤「わたしと父とは一つです。」(10:30)

●「主を知ること」は、神と人とのかわりにおいて、究極的な事柄なのです。

【新改訳 2017】イザヤ書 11 章 9 節

わたしの聖なる山のどこにおいても、これらは害を加えず、滅ぼさない。

【主】を知ることが、海をおおう水のように地に満ちるからである。

【新改訳 2017】ホセア書 6 章 3 節

私たちは知ろう。【主】を知ることが切に追い求めよう。

主は暁のように確かに現れ、大雨のように私たちのところに來られる。地を潤す、後の雨のように。

●神を知り、神のみこころをおこなうということほど、高い靈的知識はほかにありません。イエシュアは神のみこころを完全にわきまえ知った方でした。この方と御霊によって、私たちは神を知ることができるのです。預言者エレミヤは言っています(31 章)。

「31 見よ、その時代が來る——【主】のことば——。そのとき、わたしはイスラエルの家およびユダの家と、新しい契約を結ぶ。・・・33 わたしは、わたしの律法を彼らのただ中に置き、彼らの心にこれを書き記す。わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる。34 彼らはもはや、それぞれ隣人に、あるいはそれぞれ兄弟に、『【主】を知れ』と言って教えることはない。**彼らがみな、身分の低い者から高い者まで、わたしを知るようになるからだ——**」

## ベアハリート

●やがて、御国においては、神の民が「**みな、身分の低い者から高い者まで、わたしを知るようになる**」ということは、何という希望でしょうか。それは御国が御霊によって支配されているからにはほかなりません。

「見よ、その時代が來る」のです。大いなる期待をもって、それを待ち望む者となりましょう。また、「待ち望む」のは私たちだけではありません。被造物全体なのです。なぜかといえば、全被造物が滅びの束縛から解放され、神の子どもたちの栄光の自由の中に入ることができるからです。

●いつの時代にも、「**キリストの來臨の約束はどこにあるのか**」と言う人たちが存在します。ノアの時代の人々も同様でした。主の約束は必ず実現します。ですから、そうした不信仰の聲に惑わされてはいけません。「キリストも、多くの人の罪を負うために一度ご自分を献げ、二度目には、罪を負うためではなく、ご自分を**待ち望んでいる**(アベクデコマイ=「熱心待ち望む」の意味)人々の救いのために現れてくださいます」(ヘブル 9:28)。キリストの再臨、神のご計画の完成、メシアなる王としての支配、そこに確かな希望を持つことによって、人は今の時を意味あるものとして生きることができると信じます。

2019.10.13